京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十一卷　第二號

論說

德川時代の稅制……法學博士　瀧本誠一
基礎社會の發達方向(一)……文學士　高田保馬
租稅の限度に就きて(二・完)……法學博士　神戸正雄
鎌倉時代の家族制度(七・完)……文學博士　三浦周行
マルクスの勞働價値論の根本命題(一)……經濟學士　堀經夫

時事問題

經濟界不安の繼續……法學博士　戸田海市
超過所得稅論……法學博士　小川鄉太郎

雜錄

現代支那に於ける社會上の一缺陷……文學士　法學士　小島祐馬
收穫遞增減の諸觀點……法學士　石川興二
ラレーの「和蘭貿易に關する考察」……法學士　山口正太郎
近刊の經濟史に關する三著述……法學士　本庄榮治郎

新著紹介

近刊の經濟史に關する三著述

本庄榮治郎

近頃色々な書物が盛に出版される。殊に時の流行ともいふべき社會問題、思想問題に關するものは今尙極めて多く出版されてゐるが、その中には一時的際物的の書物も少くないそうである。この際に當つて、これ等の流行圏外に立てる我國經濟史に關する極めて眞摯な研究が續々上梓せらるゝことは、學界のために大に祝すべきことである。茲には最近接手した三個の著述について簡單なる紹介を試みたいと思ふ。

その一は日本經濟思想史の上に於て獨歩の地位を占めらるゝ法學博士瀧本誠一先生の近著「經濟一家言」(菊判八七四頁、定價六圓五拾錢、東京國文常發行)である。本書に輯錄されたものは嘗て諸雜誌に公にせられた論文や講演筆記等の類であつて中には二十年前に發表せられたものもあるが、總て三十四篇に及び、別に部類を分たず順序も立てずに收錄されて居る。その第三十篇に掲げられた「日本經濟學說の要領」は嘗て四十一年十一月單行本として頒布せられたもので、德川時代の經濟思想のよつて來る所を明にし、時代と經濟思想との相互交渉の理を明かにせられた一大雄篇であつて、其他「德川時代の經濟學說に就いて」「京都の經濟學說」「大阪の經濟學說」「熊澤了介の經濟學說」「支那及日本の人口論」等は何れも本邦經濟思想史に關するものであり、「經濟史の研究に就て」「家中工業」「百姓一揆」「德川時代に於ける重要の意義」「遊民考」等は日本經濟史に關する重要な研究である。其他經濟原論經濟政策等に關する論文も少くない。此等論文の中には嘗て經濟論叢誌上にも掲載されて一讀の機會を得たものもあるが、今新に一書に收められて、再び新しき興味を以て之れを讀み得たことは、卽ち本書が不朽の價値ある所以であらうと思ふ。本書題して「經濟一家言」といふ所以は實に博士が「一家の私說にして天下の公論にあらざるが故である」博士自らも「一般世上の定說に適はざるもの固より多々なるべしと信ず」といはれてゐるが、經濟學や社會政策の觀念に於て特にその然るを見る。勿論人各々その所信あり一々異見を茲に紹介するの必要はないと思ふ。要するに本書は嘗て日本經濟叢書を編輯刊行して我國經濟學史及び經濟史の研究に多大の貢獻を致され、斯學界に於ける第一人者たる博士の多年研鑽の成果を集めたものであるから本書が斯界に寄與する所の極めて

大なることはいふ迄もない所である。聞く所によれば、博士は更に近く「日本經濟史」を公刊せらるゝといふ。未だ一の日本經濟史に關する纒つた純眞な著述の存せない我學界も、博士の右の出版によつて始めてこの缺典を補ひ得ることであらう。故文學博士内田銀藏先生の遺稿も他日出版せらるゝことゝ思ふが、内田瀧本両博士の著述によつて我國の經濟史經濟學史に關する永久不磨の典籍を得ることは吾等後學の感謝に堪えぬ所であり、又斯學界の誇りとするに足る所と思ふ。

其二は農學士齋藤圭助氏の「上杉鷹山公の農政」（菊判三〇八頁、定價貳圓五拾錢、東京有斐閣發賣）これである。これは高岡博士の編纂されてゐる經濟學農政學研究叢書の第四册として出版されたものであつて、同叢書には既に第一册に栃内農學士の「舊加賀藩田地割制度」第三册に中田農學士の「佐藤信淵の農政學說」が刊行せられ、今又右の新著が公にせられた次第であつて、本叢書が日本經濟史經濟學史に寄與する所の大なるは感謝せざるを得ぬ所である。

我國經濟史の研究は次第に盛になりつゝありとはいへ、今尙草創時代を脫せない所であつて、德川時代の事柄についても其眞相の明かならざるものが極めて多い。故に吾々は先づ客觀的立場に於て虛心平氣の態度を以て、個々の場合に於ける各般の事實を精細に研究し、然る後、大量觀察によつて經濟進化の理法に到達すべきものであると思ふ。卽ち事實の記述は主觀的評論に先き立たねばならぬ。この意味に於て德川時代各藩の經濟狀態及び經濟政策等を有りのまゝに研究し記述することは德川時代の經濟史研究上甚だ重要なことである。齋藤學士の「上杉鷹山公の農政」における研究方法も頗る着實な態度を以て客觀的記述を主とし、世上公刊の書類の外、貴重なる史料を涉獵して論議を進めておらるゝことは敬服に堪えぬ所である。本書の內容は先づ鷹山公の施政方針を說き、米澤藩農政機關の組織に及び、それより轉じて、土地政策、勞働政策、穀物及金融政策、畜產政策、養蠶政策、樹藝政策、租稅制度等を說き結論に終つて居る。余は此の如き眞摯な著述が相ついで出で德川時代殊に各藩の事情が闡明さるゝとき、茲に始めて德川時代の經濟社會狀態は勿論のこと、幕府と各藩との政治的關係が明瞭となり、同時代に對する所謂封建論非封建論の見解に一の新しき斷案を與へ得るものと信じてゐる。此意味に於ても學士の研究は頗る重要なものである。たゞ一二望蜀の感を敍ぶることを許さるゝならば、先づ第一には本文內に於ては記載の事實に一々その典據が示してないこと是れである。昔は根據を示さゞるを以て博學

の證としたそうであるが、今は博引旁證の時代である。のみならず史的研究には引用書の如何は大に重視せらるゝ處である。第二には鷹山公は成程立派な君主であり種々の政策を行つた人であるが、他の藩に於ても相類似した政策を行つた名君賢相が鷹山公と同時代若くは其以前に存在したか否かといふことは頗る重要なことである。世上一般に廣く知られておる所を擧げてみても、早く保科正之あり、池田光政あり、野中兼山あり、鷹山公と同時代に細川重賢あり、其他民政農政に盡した人は蓋し少くあるまい。從つてこれ等の人々の治蹟も多少は參考すべきであり、又同樣の政策が同じ德川時代に各地方で行はれたものとすれば其間共通の理由及び相互影響等の事實もあるかも知れぬ。著者の才筆を以て此等の點にも觸れて欲しいものである。鷹山公一人だけを引き拔いて來て之を偉大なるものとして種々高調することは果して如何であらうか、殊に學史的研究に於てはこのことは特に注意すべきことであると思ふ。然しこれ等の二點はたゞ余の希望ともいふべきものであつて、勿論本書の價値を左右するものではない。余は日本經濟史界にこの眞面目な一新著を加へたことを祝福し、且つ著者の健在を祈るものである。

――附錄として嘗て本誌に掲載された高岡博士の「上杉鷹山公とフリードリッヒ大王の農政」が附いて居る。鷹山公とフリードリッヒ大王との農政上の類似點が斷片的に比較されてゐる。

其三は圓谷弘氏の「我國資本家階級の發達と資本主義的精神」（四六判二〇五頁定價貳圓東京三田書房發行）である。著者圓谷君は曩に日本大學に學び、後、京都帝國大學文學部史學科に入りしが後、哲學科に轉じて社會學を專攻し、傍、經濟學部の諸講義を聽き、卒業論文として提出されたものに多少訂正を加へられたものが卽ち本書である。而して本書の前半には「我國資本家階級の發達と資本主義的精神」を說き、後半には別に「町人階級の勃興と町人精神」を說いておられる。卽ち本書の書名は前半の題目を採つてこれに充てられたものである。內容から言へば前半は明治維新以後、後半は德川時代のことを論じておらるゝ。同種の研究には曩に本誌に掲げられた銅直勇氏の「我國に於ける營利心の起源及び發達に就いて」があるが、それは太古より德川時代までを說かれたものである。圓谷君の前半の第一編には資本主義的精神の促進を說き、第三編に資本家階級の發達を詳說し、第三編に資本家階級の支配化を說き、後半の「町人階級の勃興と町人精神」は町人階級の勃興と町人精神の普遍化との二編より成つて居る。既に述べた如く著者は史學社會學の知識に加ふるに經濟學を以てし、この多方面の知識よりし

て本問題を縱橫に剖析し研究せられたものであるから、本書は資本主義文明の我國に於ける特殊の發達を知るために缺く可らざる好著である。尤、本書の一部分は經濟論叢誌上で「我國に於ける新ブールヂョア階級の成立」の題下に、公にせられしを以て、右の一文を讀まれた方は本書の内容を大凡推知せらるゝことゝ思ふ。たゞ全體の上より見て心付いた點を述ぶれば、本書は主觀的評論的であり、文章は甚だ華やかに書かれて居り、又我國資本主義發達の特殊の事情を特に高調されてゐる。此等の諸點は本書の長所であると同時に又その短所では、あるまいが。卽ち客觀的の事實や、又はその典據の如き（特に前半に於て）果して如何であらうか、又文章のために意を傷れた所はあるまいか、又あまりに特殊相を高調して一般相を輕視された傾はないか。そは兎も角、著者の才筆を以てこの種困難なる問題を頗る面白く、讀み易く論述せられたことは感謝に堪えぬ所である。一般世人の好讀物として之を薦めたい。

終りに臨み以上の三著述を對照するに頗る興味を感ずる點がある。濱本博士の著は量に於て最も大なるのみならず莊重老巧の筆を以て各種の方面に論陣を張つてゐらるゝ所正に一大偉觀である。他の二氏の著は何れも獨立の研究であつて論文集の如きものとは類を異にするものであるが、齋藤學士は謹摯な筆致と客觀的態度を以て問題を取扱ひ、圓谷氏のは輕妙の筆を以て評論的主觀的の立場に據つて居らるゝ。akademisch な研究と journalisiik な書き振りとの差異も十分に之を認めることが出來る。兎に角我國の經濟史界にこの有益な三著述を加へたことは慶賀の至りである。妄言多罪。